Title	科学という〈輪廻〉：川端康成「花ある写真」
Sub Title	
Author	青木, 言葉(Aoki, Kotoha)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2019
Jtitle	三田國文 No.64 (2019. 12) ,p.52- 66
JaLC DOI	10.14991/002.20191200-0052
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20191200-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学という〈輪廻〉

川端康成「花ある写真」

一、二つの〈科学〉

川端康成「花ある写真」^[1]（昭和五・四、『文学時代』）における〈科学〉を考えるにあたって、二つの方向性が指摘できる。

一つは表題に掲げられた〈心靈〉の「写真」すなわち心靈学という〈科学〉であり、もう一つは小説内の登場人物「みさ子」^[2]「令嬢」間の卵巣の移植手術にみられる医学・化学である。

二つの〈科学〉は、〈魂〉を契機として接続している。臓器の移植は同時代において限りなく個人性が高い〈持ち物〉が互換されることへの驚きを含んでおり、つまり「花ある写真」内の「卵巣とは女の魂であったのでせうか」の言に表れるような、〈魂〉そのものの独立と移動であった。かくして「第一の女」みさ子から「第二の女」令嬢へと宿るため切除された〈魂〉は、本来「写るわけがない」「どこにもない」〈花〉として写真内に顕現する。魂の独立性と互換性の上に成り立つ医学と、肉眼では見えないそれを現すことができる写真。二つの〈科学〉は相互補完的のようで、しかし本質において相反している。

青木 言葉

医学や化学は人間の願望や欲望を実現する手段であり、心靈学は心中の想念を現実^[3]に可視化する論理あるいは解釈である。

それは同じことのようにでありながら、現実の質量やその持続性において決定的に異なっている。小説における卵巣移植と〈心靈〉写真は、その差を示す鮮明な例である。「結婚」を叶えるために移植を受けた令嬢が手に入れたものはリアルな臓器であり、卵巣を摘出したみさ子の写真に現れるのは幻の臓器である。むろん、心靈学者たちも幻ではなくより確固とした証拠を求め続けたには違いないが、川端の場合、心靈学という科学は心象の表れのアナロジ^[4]でよかった。

ジョン・ハーヴェイは「心靈主義が科学上の発見を接収したのは、研究のための道具としてではなく、靈現象を解釈するためのアナロジ^[5]としてである」と述べ、その科学と心靈学の接点のうちのひとつ、〈写真技術〉については「靈が靈界から写真乾板に像を送ることができる可能性の有効なアナロジ^[6]」だったと指摘する。ハーヴェイが続いて説く放射線写真についての以下の言葉は、肉眼において可視でないことが、即ちその存在を否定するものではないという、当時新たになった認識の

その事由を、かなり雄弁に訴えている。それどころか、吾々が見るのは「表面」に過ぎず、通常においては見えず「隠された」ものこそが「真実」であるという認識をさへ示唆している。

初期の放射線写真には、柔らかく乳白色で透明な、まるで心靈写真のような図が写っている。(図、省略——引用者注) 心靈写真と同様、放射線写真もまた表面的な物質の彼方にある真実を明らかにするものである——それ以前には、そして通常においては隠されたものが、今や手の届くものとなった。放射線写真の発明は一八九五年、写真の中に最初に「エクストラ」⁽³⁾が出現してから四〇年以上後である。両者はともに、人間の肉体への新たな見方を、物質世界の境界の彼方にあるものの新たな記録法を、示している。ともに、死のヴィジョンを示している。放射線写真は骨格の像(肉体の最終段階の暗示)を示す。われわれは生きている内からそれを体内に隠し持っている。「エクストラ」は、X線ですら探れぬ存在の深みを描く——心靈的狀態である。それは肉体の死を超越するという魂もしくは霊である。⁽⁴⁾

川端が、こうした認識を知識という形で持っていたかどうかは定かではない。川端が心靈学に接近したときには「心靈」現象の捏造というものが既に明るみに出されており、川端は心靈のモチーフを作品に登場させ多量の引用も行っているがそれらが本当の出来事であるとは考えていなかった。ではなぜ書いたか？ 嗜好以上の意味を見出すならば、それは確固たる現実の

姿では語り得ない心情の「真実」を反映する方法であったということが考えられる。川端において問題になるのは科学の是非よりは人間の感情の有無であり、そうした意味では、心靈学に限らず川端にとってはどの「科学」もが、非現実の幻想のためのアナロジーとなるのである。

二、化学の「輪廻」

川端康成における「輪廻転生・万物一如」思想を指摘したのは羽鳥徹哉である⁽⁵⁾。それは言語として仏教的な様相を持ちながら、勸善懲惡の宗教色が脱色されて万物は平等でありかつ転生・輪廻することを用いる。

羽鳥は、第一次大戦や関東大震災という大量死の出来事に直面した当時の川端が、「死の超越」を目指し「永生不滅」を掲げていたことを、いくつかの川端の言説から導いている。川端の本意は不明だが、羽鳥にならい川端の言葉を引けばそれは「個人の死から人間を救出すには、個人と他の個人、一人の人間と外界の万物との境界線を曖昧に暈すことが一番いい⁽⁶⁾」。また人間の生に拘らずに輪廻することは、個人の死の概念の破壊である。

続いて羽鳥(前掲)は新感覚派の表現法(川端「新進作家の新傾向解説」大正十四・一、『文芸時代』)にも同様の言説があることを指摘し、川端の小説作品においては主に「空に動く灯」(大正十三・五、『我観』)を用いて「家族的閉鎖性への反抗」「自己閉鎖性の破壊」「貞操観破壊」「自由放胆な生き方の称賛」を「輪廻転生・万物一如思想」の表れのうちに含んでい

る。

加えて、羽鳥は川端自身の生い立ちと併せて、輪廻転生思想が「死の超越」だけでなく川端の孤児の悲しみや失恋の痛手の克服として生じてきている点」に言及する。たしかにこの思想は、動植物を下等として人間の生を望むという執着だけでなく、人間個人が、特定の相手に固執することを拒んでいる。羽鳥が「失っているものの悲痛さを合理化しようとするという要素」を指摘するように、親や恋人といった個人にとって特定されるべき対象を喪失したときの悲しみを無化する意味がある。自らが草木や動物に生まれ変われば愛憎も消失し、かつ万物一如であれば親兄弟も恋人もない。この執着の否定に始まる個性や絆、係累の消滅については後述する。

川端の〈輪廻〉思想はかように多彩な様相を持つが、本稿においては思想の内容ではなくそれが現実となるか非現実であるかの問題が、川端自身の作品においてせめぎ合い、また検証されていくことを概観してみたい。

次の引用は大正十四年一月の川端の随筆「初秋山間の空想」〔『文芸春秋』〕であるが、物質の「輪廻」が証明されたことの上に「靈魂」の輪廻の証明の可能性を見ている。

とにかく自分は、この輪廻転生の説が宇宙の神秘をすつかり明けひろげるための唯一の鍵だとも思ひ兼ねるが、これまでの人類が持った思想のうちでは最も美しい者の一つだと思ふのだ。

最初は靈魂上のこととして信じられてゐたが、物質科学の進歩やその他のことでこの迷信と云つたことになつた。そ

の代りに却て物質界ではこの説が科学的に実証を得る結果を招いたと云つてもよからう。物質の輪廻転生と云ふ言葉は少々可笑しいが、その言葉のうちに含まれてゐる、流動、融通、不滅なぞの気持だ。物質は流れる。私の小指の先の一細胞は全宇宙に向かつて流れてゐると云つたつて、そんなにでたらめではないのだ。

靈魂上の輪廻転生説だつて、今日迷信と断定し得るとは云へなからう。靈魂や脳細胞や肉体とは別に存在し、しかもその正体がまだはつきり分らない以上は、それに就ての美しい仮説を軽々しく肯定出来ないと同じく否定も出来ない。

たとえばこの文の中の「私の小指の先の一細胞は全宇宙に向かつて流れてゐる」というような言葉は、「花ある写真」中の次のような一節と似ているだろう。「印度の虎の肉を組織してゐた物質が、いつ僕の心臓の中へ入り込まないものでもなし、アルコール饅頭の中で、永久に死んでゐる物質なんて、この世にありはしない」。これは、切除される「みさ子」の卵巣の二つの運命、「病院の標本室のガラス罫の中で、アルコール漬けになつて死ぬのと、令嬢と一しよに結婚をし、子供を作る」という「一個または二個の卵巣の来し方行く末」を考えた結果の〈僕〉の言である。卵巣の「二つの運命」も、物質の〈輪廻〉という大きな観点から見れば「どつちだつて大した変りはない」。この〈僕〉の意見に関してはのちほど述べるが、臓器という物質が質量保存の法則にしたがつて〈輪廻〉するということな表現は同時代の言説にも散見される。

「花ある写真」より八年後のことだが、血管縫合と臓器移植の世界的先駆者である生理学者、アレキシス・カレル⁽⁸⁾の著書『人間 この未知なるもの』(櫻澤如一訳、昭和十三、岩波書店)が日本で刊行されている。その中でカレルは肉体の物質の循環や臓器の独立を以下のように述べる。

生きてゐる肉体と云ふものは何よりも先ず一つの栄養器官である。それは科学的物質の絶間もなき運動である。それは恰も蠟燭の焰や、ベルサイユ宮殿の真中に立ち上る噴水のやうなものである。これ等の形(噴水や焰)は継続して存在するけれども、その内容は刻々變つてゐる。それ等はそれをつくつてゐるところの物質の種類と量の変化によつて、色々に変るものである。吾々の体は外部の世界からやつて来て、吾々の体を賣いて流れて、聽てまた外部の世界に歸つて行く大きな流れに買かれてゐるやうなものである。(中略) 今日尚ほ生理学者の或る人々は、吾々の体の中に物理学や化学の法則、それは外部の環境に於ける如く、存在してゐることを発見して驚いてゐるが、それは無意義のことである。吾々が体の中でそれ等の法則に出くはさなかつたらそれこそ不思議である。

内臓が吾々の外部世界との關係に於て、重要な働きをすることが出来るのはその自律神経系統のお蔭である。否、肝臓や心臓の如き器官は吾々の意志には支配されてゐない。吾々の動脈の仕事を、吾々の思ふがまゝに増進せしめたり、減退せしめたり、心臓のリズムや、吾々の腸の蠕動を増減することは不可能である。

これ等の機能が独立してゐるのは、彼等自身の中に反射弓があるからである。これ等の部分的なる系統は、組織の中の、血管の周囲に散在する神経細胞の小さな集りからつくられてゐる。反射の中枢は沢山あつて、それが内臓に自律性を与へるのである。(中略) 大部分の器官は或る程度の独立性を持つてゐる。彼等は肉体から切り離された時でも、尚ほ働くことが出来る。(傍線引用者、以下同)

人間の体の物質は個人の一生の期間、体内にとどまり続けるのではない。「外部の世界からやつて来」て、また「外部の世界に歸つて行く」。この「大きな流れ」は輪廻的であらう。

かつ「大部分の臓器」は「独立性」を持つており、これもまた個人に固有のものとして、個人の一生に仕えるものではない。「吾々の意志」の「支配」は及ばないので、たとえ望まなくともそれは「切り離され」て「尚ほ働くことが出来る」のである。つまり身体を構成する物質・細胞一つ一つに始まり、固有の「持ち物」と思われた臓器すら個人の意志に關係なくへ生き「たまま外部へ出て行くことができる。これが生理学の示す「眞実」であり意志と感情を排した「輪廻」的世界である。

次いで、同時代の卵巣移植についても確認をしておきたい。日本で人間を対象とした最初の臓器移植が行われたのは昭和三十一年、新潟大学における腎臓移植であり、昭和五年時の「花ある写真」の卵巣移植は相当空想的に思われるが、緒方十右衛門『婦人科診断及治療学 後篇』(昭和二、南山堂書店)は卵巣切除の際の「欠落症状」ならびに卵巣の「移植」について、海外の症例を元に以下のようにまとめている。

「欠落症状」(中略)

罹患卵巣ノ除去ニ就キテハ、卵巣既ニ罹患シ為メニ患者ハ多少ノ苦痛ヲ蒙レリ、今其剔出ニヨリ自己健康快復ノ喜悅感情ニ支配セラレテ全然欠落症状ヲ見ザルコトアリ。(中略)之レニ由テ是ヲ觀レバ高度且ツ著明ノ欠落症状ハ、全ク健康ノ卵巣ヲ除去セシ場合ニ最モ顯著ニ現ハルモノト理解スベシ。

身体上ノ著変ハ脂肪ノ増加ナルモ総テノ婦人ニ起ルニアラズ。殊ニ罹患卵巣ノ除去ニテハ之ガ増加ヲ見ルコト少ク、縦令去勢後肥滿ヲ見ルモ是レ經血ノ損失ヲ免カレ、健康恢復ニ由ル結果ニシテ、其ノ脂肪増加ハ稀レニ見ルモノナリト。

高度ノ脂肪沈着ハ、グレーベック Glarvecke 氏ハ其七
%ニ、アルテルツーム・リゾー Alertum, Lissau 氏ハ四二
%ニ実見セリ。一般ニ肥滿ハ若年期ニ健康卵巣ノ除去後現
ハルル現象ニシテ動物ニテハ此關係著明ナレバ、人類ニ於
テモ亦同様ナラント結論シ。(人名に付した傍線はママ、
以下同)

除去されるべき「罹患卵巣」を持つのは、「花ある写真」において「卵巣が悪」いために、「立派な卵巣」「みさ子の卵巣」の移植を待つ令嬢が該当する。現代においては卵巣がん等による摘出であっても、更年期様症状をきたす可能性が指摘されるが、この書における罹患卵巣の除去については、その後患者にとつて殆ど問題がないような記述である。卵巣の欠落症状のそれとして「血管運動神経ニ於ケル障碍」、「眩暈・心悸亢進・発

汗」等が数えられているが「病変アル卵巣除去」の場合には「喜悅感情」が上回つて「全然欠落症状ヲ見ザルコトアリ」という。

一方ここで欠落症状の深刻さが強調されているのが「全ク健康ノ卵巣ヲ除去セシ場合」であり、そして右には引用しなかつたが「年少婦人ニアリテハ、其障碍ヲ受クルコト甚ダシキヲ常トス」(傍点ママ)という、年齢が若い場合の摘出である。つまりこれらの条件は、初めてみさ子を見たときの〈僕〉に「あの娘さんはまだ子供らしいではありませんか」と言わしめる「僅か十七のみさ子」に合致する。

そして卵巣摘出後の「脂肪ノ増加」「高度ノ脂肪沈着」については、〈僕〉のいとこが既に経験している。「卵巣がなくなると、彼女は急に太りだしました。そしてもうそれ以上太りやうがなくなつた、ちやうどその時に——(中略)張りつめた脂肪が、彼女の体のなかの魂を押しつぶしてしまつたのでせうか——彼女は少し気がちがつて、今度は急に痩せて来ました。それから色のどす黒い女になつてしまひました」。いとこが卵巣摘出に至つた経緯は明らかではないが、緒方の記述とはやや違ひ「花ある写真」の小説中ではいかなる形で卵巣を失つても、それが失われた以上「女」として変貌することは免れないようである。

「一般ニ肥滿ハ若年期ニ健康卵巣ノ除去後現ハルル現象」、これは年齢と「健康卵巣」の除去の記述においてやはりみさ子が該当しよう。(「みさ子も太つて、気が変になつて、痩せて、どす黒い女になつてしまふ」)。

なおいとこの「気がちがつて」きたという箇所は、同書の中の「血管運動神経ニヨル欠落症状ノ外、不安・支離滅裂錯乱・不満ノ感・記憶力ノ減少・伝導能力ノ消失等ヲ来タシ、精神ハ遂ニ不安定トナリ、統一的ニ健忘症ニ陥リ、或ハ自殺ヲ企ツルニ至ルコトアリ」という一節や、「卵巣切除後ノ神経症状」の項目の中の「婦人生殖器ノ爾他手術ニ比シ、卵巣摘出後ニハ、急性狂癲又ハ鬱憂病 La manie aigue, la lypémanie ノ範圍ニ属スベキ精神障碍ニ遭遇スルコト多ク是等ハ殊ニ精神障碍ヲ誘導スベキ先天性遺伝ヲ有スル者ニ多ク実見ス」の記述が当たるだろう。〈僕〉がみさ子に「訊きたいこと」のうちに「精神病であるか」ということが入っているのは、そうした事情も含んでいそうである。

以下は同書より「卵巣ノ移植」についての引用である。

「卵巣ノ移植」(中略)

クナウエル氏其他多数ノ学者ハ動物ニ自家移植ヲ行ヒ、移植セル卵巣ハ栄養ヲ維持シ且ツ機能ヲ営ミ得ルモノナリトセリ。

他人ノ卵巣ヲ以テセル移植 Homoplastische Transplantation ハ臨牀上其効果著シカラザルガ如シ。デーデルライン氏ハ腹部側壁皺襞中ニ移植シタル一例ヲ有シ、クレーニヒ氏ハ二年乃至四年前ニ卵巣ヲ除去セシモノノ子宮膀胱間ノ、腹膜皺襞中ニ移植セル四例ニテハ、手術後四―六週日ニテ一時欠落症状著ルシク軽快シ、情欲発動モ静止セシガ、幾何モナクシテ再ビ以上ノ障碍ヲ起セリ。モーリMoris 及ビクラーメルCramer 両氏モ亦同様ノ例ヲ実験セ

リ。

之レニ反シテモーリ氏ハ両側卵巣摘出直後他人ノ卵巣ヲ卵巣固有ノ位置ニ可及的近く移植セシニ爾後月経来潮シ、加之ナラズ妊娠分娩ヲ遂ゲタルノ例ヲ見タリ。

以上述ブルガ如ク自家移植ハ略ボ成功セシガ如キモ、同種他体ノ卵巣移植ハ自家移植ト同様ノ成績ヲ得ザリキ。古来異種ノ卵巣移植ニアリテハ殆ンド不成功ナリシガ、近來動物試験ニ於テハ種族ノ近キモノノミ成功セシ例アリト云フ。

ほか、昭和元年八月の『中外医事新報』にも「卵巣ノ子宮内移植」(セールドコッフ述)の記事があり、二人の婦人のうちの一人の卵巣を、もう一人の子宮内へ移植した後「月経ハ正常ニ存在セリ、将来ニ於テ受胎ノ成功スルヤ否ハ興味アル問題ナリ」と記されている。

これらを見る限り、「花ある写真」において令嬢がみさ子の卵巣で子供を産むという可能性の示唆は、川端の全くの創作によるものでもないということがわかる。空想的に思われる小説のいくつかの事項、とりわけ医学と化学に関しては同時代において相当程度の現実性を持っていたといえよう。

三、心靈のへ花

〈僕〉は、病院で美しく「目立つ」令嬢のことを知っていたが、みさ子については令嬢への移植手術の件で看護婦から教えられた。手術後「病室から先きに出歩けるやうになつた」のはみさ子で、「僕は間もなく彼女の写真を撮るほどの知り合ひと

なりました」。卵巣切除後のみさ子を写した写真には、「写るわけがない」花、「花の枝も器もない」「いきものらしい感じ」の花が現れる。

先行研究として小林敦「二次元化する〈魂〉——川端康成「花ある写真」」があり、「〈僕〉の視線」が「現実のあらゆる事象を、文脈から切断された互いに無関係なものとして」見ることに合わせ「〈花〉が複数のイメージを含み持ち、それを交替させていくように、令嬢とみさ子の二者もまた重なり合い、相互に交換可能な存在として〈僕〉の前に立ち現れる」こと、そして「〈卵巣〉を奪われ、結婚することもままならぬ身体となることを余儀なくされたというみさ子の〈悲しい〉《物語》を〈僕〉は見出しながらも、「《物語》に絡め取られることのない、浮遊した存在への飽くなき志向」を持つと論じている。大きな構図において本稿も同様の立場だが、みさ子に起因する心霊現象について「〈僕〉のまなざしにあわせ」て「周囲の世界もまた二次元化していく」（傍点ママ）「何の脈絡も連続もない断片の羅列となっていく」（小林）とみるのではなく、みさ子の現す心霊現象はむしろ文脈を繋ぎ、実体の代わりに現れ言葉の代わりに語ることなのだと思える。

まずは文中の言葉から「花」の意味するところを確認したい。

僕は考へたのですよ。花といふ花は、ことごとく散り落ちてしまふものです。けれども、もし花が、枝や茎を離れるやたちまち昆虫となつて、空をひらひら飛び廻るならば、大変愉快なことにちがひないとね。(三三)

もしみさ子の魂が彼女から令嬢に移つても、魂としての働きを生き続けるならば——なるほどこれは、花が昆虫となつて空を飛ぶのと同じやうに、なかなか愉快だと、僕には思はれるのです。(七七)

この二つの文章の傍線部には、修飾の差こそあれ花が空を飛ぶという同一の事項が書かれている。その上で、後者にはこの事項に対し「同じやうに」の語で、魂がみさ子から令嬢に移ることが並列される。これらのことが「〈僕〉」にとつて「愉快」であるのも同じで、つまり「花」である「魂」は、一度きりで散り落ちるはずだが、枝や茎に相当する身体を離れても、昆虫という「一個の独立したいきもの」となることの愉快である。さらに「卵巣とは女の魂であつたのでせうか」の言をふまえれば、「花」が（女の）魂であり卵巣であることは明らかで、移植されてなお機能する卵巣は「独立」して「輪廻」する、つまり「容れもの」を変えて生き続ける魂の喩えなのである。

写真には、花だけでなく「光」も写り込む。撮影時に「まぶしい光」はなかったのに「今度は大輪の花のかはりに、光が入つてゐる」。この光とは「女の魂」に付随する光に他ならない。「その手術の結果は、女としての令嬢に、どのやうな光を加へるか」と、「〈僕〉」は考える。卵巣、花、女の魂を手に入れて、令嬢は「女として」光を増す。つまり「〈僕〉」にとつての「女」の美しさの表現とは「光」なのである。次の引用は小説冒頭の頃の白くやはらかい膨らみのほかに、僕は山寺も、そこへ行く道も、また彼女の顔も、何一つ憶えてゐないのです」「木蓮

の花びらのやうな、また白い半月のやうな——しかし、もつと温いものです。霧の夜の乳色の街燈のやうに——とにかく彼女の白い円みは、思ひ出す度に、僕をいつでも子供心にくれくれます。花びらはともかくも「半月」「街燈」は発光するもので連関しており、そして「僕」の家へ来てから「いつも綺麗に桃割髪に結つた」みさ子のその髪は「まことに女らしい感じ」であつたが、「この女らしさは、焰の消える前の美しさ」と「僕」には思われた。

卵巢、女の魂、そこに付随する光——みさ子の写真には彼女が失うものが写るのであつたが、それは令嬢に転移する。

ところが、その三つの新聞をみさ子の部屋に投げ込むと、どうしたわけでせう、一つだけがいきなり立ち上つて、彼女の寢床の上を飛び廻るのです。彼女はまだ眠つてゐたのでした。

僕はその新聞の落ちつくのを待つてゐました。そして開いてみたのです。

さうだつたか。——と、僕が思はずつぶやいたといふのは、あの令嬢の婚礼の写真が出てゐるのです。

この写真にも花があります。これは本物の花でありま
す。だが、この婚礼は虚偽だ。しかし静かに考へてみる
と、これは真実である。(十)

新聞の令嬢の写真の中の「花」は、婚礼を彩る装飾の花であり、同時に令嬢が結婚のために手に入れた卵巢——女の魂の「花」である。令嬢その人は一層「光」を放つ姿であつたに違いない。全てのもを手に入れた令嬢の写真の中の「花」は、

そのすべてが実体である。そして、みさ子の写真に写つたそれらは、現実においては、いうまでもなく虚像なのである。それは、一つの「卵巢」を軸に反転した一枚の写真のポジとネガである。令嬢が本物の結婚をしている裏で、みさ子は「結婚の夢」を見ている。

四、「魂」の互換性

「僕」はこの「医学上の手術」を「あまりに詩人的な感情でいぢくり廻してゐる」。また「勤人」ではないという記述からも、「僕」が作家のたぐいらしいことは窺える。「僕は足を早めて、みさ子を追い越すと直ぐ看護婦に、あの娘さんはまだ子供らしいではありませんか。」という記述には、初めて認識したみさ子が年端もいかないのを見て、可哀想だというようなニュアンスさえ宿しているが、その上でこの手術が示す科学の「真実」に驚くのである。

ただの卵巢で？

なるほどと、僕は鋭い美しさに打たれて、屋上庭園へ登つて行つたものです。高架線を黒い貨物列車が通つてゐました。

卵巢が英雄なのか。医者が英雄なのか。はたまた、令嬢が英雄なのか。——とにかくこの手術には、一匹の新しい英雄がひそんでゐると、僕は思つたのでありました。

二つの手術台です。それぞれに、若い女が真裸で横たはつてゐます。魔睡剤で眠ります。同じやうに腹を切り開かれます。そして、彼女等が眼を醒ますまでに、第一の

女の卵巣が、第二の女の腹の中へ移されてしまつてゐます。

令嬢は貧しい娘のその卵巣で結婚をします。——子供を産みます。子供は誰の子供でせうか。令嬢のですか、みさ子のですか。(五)

「医者から申しますれば」「ただの卵巣で——どの女のもでもございませんでせう」。看護婦の言つたこの一言を皮切りに、**僕**は以下のように続ける。みさ子の卵巣を移植して産む令嬢の子供は、「ただ一人の子供で——どの母のものでもないでせう」。そして、移植されてもなお働き続ける卵巣を**魂**としてみると「ただ一個の魂で——誰のものでもないでせう」。

僕は科学のそうした「鋭い美しさ」に抗いきれない。科学は、いとも簡単に、感情の拘泥を後目に、不可能であるはずのことを可能にしてみせる。その卵巣の**へやり取り**には、互いの面識すらなくてよい。**僕**は卵巣・医者・令嬢のいずれが「英雄」なのだろうかと考えるのだが、その中からみさ子は除外されている。卵巣を差し出すのはみさ子であるのに、**僕**が卵巣や医者や令嬢に限って「一匹の新しい英雄」を見出すのは、彼らがそのような科学の「鋭い美しさ」、科学であるゆえに一個の卵巣の独立こそが**へ真実**であるという明快な答えを支持しているからである。そして、科学のいうように「誰のものでもない」卵巣であるならば、みさ子が悲しむ必要などこにもない。

であればこそ、美しい令嬢、「貧しい娘の卵巣を奪ひ取つて

まで、自分の結婚を健康にしようとする強い令嬢」に、**僕**は恋をする。卵巣が偶然にも貧しい娘の体内にあつたとして、それを「健康な」結婚のために手に入れることにためらうことのない「強」さ、また科学の説く合理的な真実による「鋭い美しさ」を、**僕**は令嬢にも同様に見出したはずなのである。

僕は令嬢の婚礼の写真を見て、はじめ「この婚礼は虚偽だ」とするが「しかし静かに考へてみると、これは真実である」という。令嬢の婚礼を虚偽と判断するのは令嬢の卵巣を「みさ子の」卵巣だと感じるからで、けれども科学の見方をとれば厳然としてそれは令嬢の卵巣として機能している「真実」である。

僕はみさ子の静かな寝顔に見入りました。そして、そこに澄み通つた悲しみを見出しさうになつた時に、あわてて彼女を揺り起したのであります。(十)

「澄み通つた悲しみ」の語においては、令嬢の結婚を「虚偽」とする**僕**の気持ちが通つている。「みさ子の」卵巣が奪われた悲しみだからである。だが「見出しさうになる、すなわちみさ子の「悲しみ」があつたとも、本当に**僕**がその「悲しみ」を感じたとも断定はされない。**僕**は確定・断定する前に、みさ子を「あわてて揺り起」している。

しかし、本当に卵巣——魂は互換可能なのだろうか。

小説の末尾で**僕**は、**僕**に抱かれたみさ子が「少しもびつくりしない」ことについて、「僕でなくどんな男にであつても、彼女はびつくりしないのでありますでしょうか」と考へる。ここにおいて、それまでみさ子の卵巣や魂に限って取り

ざたされていた存在の互換性が〈僕〉にもはね返ってくる。まるでへただ一人の男／女であって——どの女／男のものでもない〉とでもいうように、それぞれの個性や特定の個人どうしによる絆は否定される。〈僕〉の思い出の中のいとこに、顔という特定性が欠如していることに注目すべきで、「僕のいとこのやうに」「みさ子も太つて、気が変になつて、痩せて、どす黒い女になつてしまふものなら」「今のうちに、みさ子の美しい顎を、下から見上げておかねば」というのは、〈僕〉にとつていとこを始原とする〈卵巣〉——女の魂——そこに付随する光——の女の互換性である。

だが一方で、みさ子は〈僕〉に抱かれることを予期していた可能性もある。「僕の帰ってくるのが分つて、必ず道まで出迎へてくれる」「僕のことばかりを考へてゐるからこそ、さういふことも出来る」。かようなエピソードがもし本当なら、結末のみさ子にとつて〈僕〉は〈誰でもいい〉存在ではない。

僕の家は長い坂の上にあります。僕は外出好きですが、勤人ではありませんから、出る時も、帰る時も、でたらめなのです。

にもかかはらず、僕が坂の下まで帰つて来ると、みさ子はいつでも坂の上から下りて来のです。坂の中ほどで出会ひます。

お帰りなさいまし、と、ちよつとはにかんでから眼をそらせて、そのまま坂を登つて行くのです。

僕の帰つて来るのが分つて、必ず道まで出迎へてくれるといふことは——彼女をたまらなく寂しいものにします。

僕のことばかりを考へてゐるからこそ、さういふことも出来るのにちがひないではありませんか。坂を登り切つてしまふまでに、僕が彼女をいとしく思ふやうになつたところ、不思議はありませんまい。(10)(九)

みさ子は何も語らない。みさ子が表すのは心靈現象であり、その写真にはなぜ〈花〉と〈光〉が入るか、〈焰〉が燃えたり、みさ子でない「何か」が人の手に「字」を書くのか。その理由は「僕には分らないこと」とされるが、それらがみさ子の感情の反映であることの示唆はあろう。

施療患者であるみさ子は、それまで「鏡」を「あまり見ることがなかったが、彼女が〈僕〉の家で「第一番に目をつけた」のは「鏡台」で、彼女が「私、鏡を見てもようございませう？」と言ひ終わらぬうちに、それはみさ子の前に「飛んで来」る。「妻の化粧品を使つてもよいと言つたら、彼女は喜んでお化粧をしたにちがひありません。みさ子は卵巣を失つてから「女らしい感じ」の桃割髪に結い、化粧こそしなかつたが「焰」のような美しさを宿す。「鏡を見」るのはその手始めである。これらのことは、多く〈僕〉からの解釈を含みつつ、しかしみさ子本人の心情との因果がある。それは〈互換〉されることのない「みさ子の」感情である。

五、「時代」の「祝福」

最後に、「花ある写真」の科学に対して、昭和二年頃の執筆とされる川端の未発表作品「時代の祝福」(11)の記述を照らし合わせてみたい。

この小説では文明批判と同時に様々な科学的空想、そして科学による輪廻転生の実現化が、皮肉を含みつつ主人公〈彼〉の「講演」という形で展開される。そしてこの「講演」の場面の前後には、「講演」で批判の対象となつた「古めかしい抒情詩」すなわち私小説的な〈彼〉の「甘悲しい思ひ出」を書いた小説「篝火」の再現が施されている。作中で「処女作」とされる「篝火」は、実際は処女作ではないが大正十三年三月に『新小説』に発表された川端の実作で、自身の伊藤初代との婚約とその破棄を題材としていることは当時の読者も周知するところであつた。

「花ある写真」との関連は、「花ある写真」において、固有の〈魂〉を否定、あるいは固有性から脱却することのみさ子の「悲しみ」が〈へない〉可能性を示した医学・化学が、ここでも人間感情を無化するものとして著されていることである。そのような〈科学〉的空想は礼賛の形をとっているが、「感情」を象徴する〈彼〉の「思ひ出」の再現はそれに拮抗するものとして存在している。だが「思ひ出」の再現に際して〈彼〉の感慨は一切描かれず、「篝火」―〈彼〉の記憶の中で輝く思ひ出は、鵜飼の終了とともに消える。季節はちがえど「その時のやうに」鵜飼を見ようと決めた〈彼〉の前で、つまり「六年前と同じこの部屋」で「六年前と同じことを云」う〈彼〉に対して、「その時の加代子と同じやうな」言葉を返して宿の女中がほほえむ。けれども情景描写は「処女作」をほとんど写したように同じでも、小説「篝火」と違ひ〈彼〉の心情だけが書かれなないのである。たとえ書かれなくとも、この「思ひ出」を抱き続け

る〈彼〉の心情があることは窺えるが、〈彼〉は自ら「甘悲しい思ひ出」について講演で以下のように述べるのである。

———なんのために僕はそんなに鵜飼の篝火が見たいのか。私に甘悲しい思ひ出があるからですか。ところが私は思ひ出なんていふものはぞつとする程嫌ひだ。(中略)また過去といふ奴は糞みたいなものかもしれない。それも馬なんかは明らかにぼたりぼたりと道へ落して行く。(中略)一体、人間は馬よりどこが優れてゐるのですか。真実な意味ではつきり云へる人はあるまいと思ふ。例へば魚は人間よりも上品に子供を拵へる。この魚の上品さを見習つて、人間も近頃では人工妊娠といふことをやり出してゐます。

その甘悲しい思ひ出は、さつきからくどくどと罵つたやうに、私は自分の糞よりも見たくないのであります。だからそんなセンチメンタルな思ひ出のある岐阜では、私は意地にも艶消しな話、古い抒情詩を踏みつぶした科学の話がしたくなる。(中略)人工妊娠は現に日本でも行はれて立派に成功して居ります。つまり父親がなくとも子供が産めるという甚だ散文的方法であります。魚のやうに上品に子供を拵へることが何が可笑しい。

これら二つの引用文が示しているのは、思ひ出や過去の否定の直後に人工妊娠について触れられることである。それは唐突に見えるが、その因果関係とはつまり、思ひ出を持たない魚／動物が「上品に子供を拵へる」と同じく、思ひ出を形成する親子および夫婦関係の否定のために人工妊娠が必要だからであ

る。「センチメンタルな思ひ出のある岐阜では、私は意地にも艶消しな話、古い抒情詩を踏みつぶした科学の話がしたくな
る」、思い出を消すのは科学である。もし「人工妊娠」が可能
になれば、「親子といふ厄介な絆が地上から消えてしまひ、夫
婦といふ鎖も重い目をして引きずることがなくなる」。

「花ある写真」における、みさ子の卵巣にまつわる帰属先を
持たない卵巣、子供、魂も、この同一線上にある。卵巣移植が
意味する「どの女のものでもない」卵巣、「どの母のものでも
ない」子供、「誰のものでもない」魂。個性も係累も絆もな
ければみさ子の悲しみも存在しないように、「時代の祝福」で
語られているのは、「センチメンタルな思ひ出」を生まないた
めに逆算された「人工妊娠」なのである。

——科学がそこまで進歩すれば当然人間が猫になったり、
麒麟が植物になったり、百合が鉱物になったりすること
も自由自在となるにきまつてゐます。(中略) 輪廻転生の説
を唱へた仏教の聖者達は新しい予言者として甦ります。

——とにかく、あらゆる人間のあらゆる希望、あらゆる空
想はわけもなく成就されて、この世は変化と怪奇の乱舞と
なるでせう。人間の一切の欲望は実を結び、人の世の悩み
は煙のやうに消え、今日の感情は目盛のない物尺のやうに
役立たなくなる。(中略)

人間が考へることはすべて出来上る日が来る。現在のすべ
てのものが死に、現在にないすべてのものが生れる。そし
てそいふ時代が来れば文芸はどうなるのですか、文芸
は？

ここにおいては科学による人間の願望成就とともに悲願も悩
みも感情もなくなるものが述べられており、つまり卵巣移植や
人工妊娠の先に、やはり感情の拘泥を拭い去った「輪廻」転生
の世界という帰結がある。

そして「科学」のほかにもう一つ、「甘悲しい思ひ出」を描
くことを否定するものに、プロレタリア文学もが挙げられてい
ることを指摘しておきたい。

篝火を見て古めかしい抒情詩を歌ふやうなことは、私達文
学者の間では時代後れであるばかりでなく、時代の良心に
背くものとされてゐます。篝火を見るよりも鵜を見よであ
ります。けなげに早瀬へ潜つて鮎を捕へる鵜は、自分の獲
物が咽を通らないやうに首を締められてゐる。そして飼主
に口の中の魚を搾り出される。だから何十匹の鮎を捕へて
も彼は飢へてゐる。これは今日の多くの生産者の姿そつこ
りである。これは今日流行の鵜飼の見方である。

思ひがけなく時代の口真似をさせられた自分に気がつい
て、彼は目の前の人々を毒々しく嘲りたくなつた。

プロレタリア文学はむろん直接的に「思ひ出」やそこにまつ
わる感情を書くことを禁じるものではないが、「篝火」という
〈私小説〉と対立するものとして、〈彼〉の「感情」の表出や
そのやり場を塞いでしまう。〈彼〉にとつて〈科学〉—医学・化
学とプロレタリア文学は、ともに「感情」を文学の照準から外
すものである。

だが「時代の祝福」における〈彼〉のこうした講演の大部分
に与えられる総括とは、「人に分る詩を罵つ」たということだ

あり、むしろ〈彼〉にとつて重要なのは「人に分らない詩」であるという示唆が残されている。

そして彼はオリヴァ・ロツチ・ゼエムス、フラマリオン（中略）などの心霊学者が報告した心霊現象の話をした。

そこから彼の奇怪な文学論へは入つて行つた。彼のじやうだんばかりを笑つてゐた聴衆はもう笑はなくなつた。聞いてゐないのだ。分らないのだ。分つたら不思議だ。

それは文学論でなくて、彼の悪夢だつた。やはり、彼の奇怪な詩であつた。彼はさつき人に分る詩を罵つて、今人に分らない詩を説いたのだつた。彼の声を離れて人々の体がざはめき出した。

——八時が近づいて参りました。もう川原に篝火が燃え出した頃と思ひます。私は鵜飼を見に行かねばなりません。

科学—化学等による感情や過去、「古い抒情詩」の否定とは「人に分る詩」を罵ることであり、「心霊現象の話」については「人に分らない詩」を説くことであると述べられている。ただこの「心霊現象の話」は「悪夢」「奇怪な詩」ともされて、それ以上の展開を見ない。輪廻転生を〈現実〉にする化学に対し、輪廻転生を「一個のおとぎばなし」と考えるという〈彼〉にとつて、「心霊現象の話」すなわち心霊学は、化学—科学と差別化が図られているとも見えるが、いずれにしても化学—医学と心霊学の区別が明確な輪郭を持つのは「花ある写真」であり、「時代の祝福」が持つのはその萌芽である。「時代の祝福」の対立軸は、主として私小説的な〈感情〉の世界と感情を無化

する科学にある。「時代の祝福」「花ある写真」が迂遠な形で希求するのは感情の〈ある〉世界であり、しかし医学・化学や「今日流行」のプロレタリア文学に阻まれる。それでも「時代の祝福」では「思ひ出」への意志があり、「花ある写真」では心霊学が言葉のない感情を表す。

川端において科学批判とは、一見礼賛に見せかけた複雑さはあるが「人に分る詩を罵」ることのみに過ぎない。同様に、プロレタリア文学に送る批判も「時代の口真似」である。「人に分らない」くても川端が語りたかつたことは、理屈が説明されぬまま作品で多く現れた心霊の不思議や、ままたらない現実の中で抱く輪廻の〈幻想〉である可能性があり、なおかつそれは私小説のセンチメンタリズムを排してなお、感情の〈ある〉世界なのである。そうしたことをふまえて、「花ある写真」の語りぬみさ子の〈感情〉を考へることができる。

川端にとつてはどの〈科学〉もが非現実の幻想のためのアナロジーであると、第一節で述べた。〈輪廻〉の実現がこうして〈幻想〉的に語られることを可能にしているのも、〈科学—化学〉である。卵巣が、魂がひらひらと飛び廻る、この描写も医学と化学がもたらす現実化のゆえであり、それは作者による科学〈批判〉の結果ではない。

だがそうして創出される物語の舞台よりも大事なものは、〈仮定〉された感情のない平らかな世界で、語らず跋扈する、心象のアナロジーとしての〈科学〉である。みさ子がここで涙ながらに「悲しみ」を訴へることが科学に対する文学の義務ではない。卵巣を「奪は」れて何も語らず、〈僕〉の帰りを待つて

「静かな寝顔」で「結婚の夢」を見る。〈僕〉に抱かれても「少しもびつくりしない」、これはみさ子の行動の〈事実〉だが、彼女の心霊は時に荒々しい。「突然、部屋中に鈴が鳴り渡つたり、焔が燃えたり、帽子が走り廻つたり、机が飛び上つたり——そういふことは、みさ子が来てからといふもの、僕の家では一向珍しいことではなくなつてしまひました」。また、いとこの持つ「温い」やわらかな光に比して、みさ子の「女らしさ」が放つ光は〈焔〉なのである。

これらの現象はみさ子の心中をはつきりと示すことはない。けれどもそれは〈魂〉が「誰のものでもない」からみさ子が奪われても、失つても、かわりはないという化学・医学の文脈に回収されることはない。〈心霊〉の現象によつて「みさ子の」彼女固有の感情が〈ある〉ということがわかるからである。感情のない透明さ、まるで色のない純粋さを医学・科学の〈真実〉ゆえにまといながら、しかし心霊の〈科学〉によつて、見えないはずの人間の感情があぶりだされるのである。

注

- (1) 本稿における川端康成作品の引用はすべて新潮社版「川端康成全集」(昭和五十五・二～五十九・五)に拠る。
- (2) ジョン・ハーヴェイ「心霊写真 メディアとスピリチュアル」(松田和也訳、平成二十一、青土社) 霊体を示す。
- (4) ジョン・ハーヴェイ(前掲)
- (5) 羽鳥徹哉「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(昭和四十一、三、「国語と国文学」)

- (6) 川端康成「永生不滅」(大正十四・一、「文章俱樂部」)

(7) 羽鳥は次のように結論している。「悲しみは、輪廻転生思想そのものの中にある」「川端の、永生不滅・輪廻転生の思想は、はじめから、そこに否定の要素をはらみながらも、当初は、現実的に、その科学的実証を得ようという真面目な試みとなつてあらわれたりするが、後次第にそれを否定する要素は強くなるばかりである」が、「二夢」としては、いつまでも川端の意識の一方の極に残つて、今日まで続いているとみられるのである」。

- (8) 一八七三—一九四四(明治六—昭和十九)年、フランス生れ。一九二二(大正一)年にノーベル生理学賞・医学賞受賞。

- (9) 平成十四・十二、「論樹」

(10) 帰宅の予知は、川端の他作品においても愛を起源とする心霊の力の発現として記されている。「大学の研究室からお帰りの時間はまだまちでありましたし、郊外の停車場から家へは、にぎやかな商店街と、寂しい雑木林沿いと、二つの道がありましたけれど、私達は道の半ばでできつと出会つたのでありました」(川端康成「抒情歌」昭和七・二、「中央公論」)。

- (11) 本稿における引用は「川端康成全集 第二十四巻」(昭和五十七、新潮社)に拠つた。

(12) 「篝火は早瀬を私達の心の灯を急ぐやうに近づいて、もう黒い船の形が見え始める、焔のゆらめきが見え始める、鵜匠が、中鵜使ひが、そして舟夫が見える。(中略) 舟足の早いこと。私達は篝火の中に立つてゐる。(中略) そして、私は篝火をあかあかと抱いてゐる。焔の映つたみち子の顔をちらちら見てゐる。こんなに美しい顔はみち子の一生に二度とあるまい。」「篝火」に対し、「闇が流れてゐる——彼には広い川幅が布のやうに沈んだ闇の滑らかな肌に見えた。それだけに、漂つて来る七つの篝火は感情的だつた。(中略) 舟足は早かつた。彼はもう篝火の中に立つてゐた。炎の旗が船からゆらゆら流れてゐた。(中略) 彼は頬に篝火を感じた。この焔があ

かあかと映つてゐた加代子の頬を思ひ出した。「時代の祝福」がある。

(13) 「文学といふものは」「あの馬糞のやうなもの」「私の「篝火」もなんのことはない、馬の糞なのです」と〈彼〉は述べる。今の〈彼〉は感傷的な「思ひ出」を抱くことに否定的である。生きてゐる以上過去は産出されるが、動物のようにそれを「ふり返らない」ことを講演で説く。